

高等院校日语专业系列教材 ● 总主编 修 刚 王健宜

日语 作品选读

张晓希 周海琴 编著

Japanese

南开大学出版社

高等院校日语专业系列教材

总主编 修 刚 王健宜

日语作品选读

张晓希 周海琴 编著

南开大学出版社

天 津

图书在版编目(CIP)数据

日语作品选读 / 张晓希, 周海琴编著. —天津: 南开大学出版社, 2006. 7

(高等院校日语专业系列教材)

ISBN 7-310-02457-5

I. 日... II. ①张... ②周... III. 日语—阅读教学—高等学校—教材 IV. H369. 4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2006)第 033818 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人: 肖占鹏

地址: 天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码: 300071

营销部电话: (022)23508339 23500755

营销部传真: (022)23508542 邮购部电话: (022)23502200

*

河北省迁安万隆印刷有限责任公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2006 年 7 月第 1 版 2006 年 7 月第 1 次印刷

787×1092 毫米 16 开本 16.25 印张 317 千字

定价: 26.00 元

如遇图书印装质量问题, 请与本社营销部联系调换, 电话: (022)23507125

高等院校日语专业系列教材

编 委 会 名 单

总 主 编

修 刚 王健宜

编 委

张秀华 张晓希 张敬茹 石云燕 赵文华

序

进入 21 世纪以来,随着高等教育的迅猛发展,高校日语专业大幅度增加。据中国日语教学研究会的统计,中国高等学校中设立日语专业的学校已经由此前统计的 110 所,上升到 210 所左右,增加了近一倍。而天津的日语教育便是其缩影:曾几何时,天津的高校只有四所大学设有日语专业,而今不含高职院校已经有八所学校有了日语专业,而且专业设置和在校生数量仍在增加之中,更何况高职院校的日语专业和学生人数的增长更不可小觑。

日语专业设置和日语学习者的增多,使高校日语教学出现了空前繁荣的局面。与之俱来的,则是日语教材以及辅助教材数量的增长,从某种意义上可以说,高校日语教材也迎来了“战国时代”。有人对此感到不安,担心穷于选择,会造成混乱。其实不然,教材数量和种类的增长是一件好事。首先它是我国日语教学新时期的产物,同时也为百花齐放、百家争鸣提供了有利条件与氛围。只有经历这样的过程,适合中国日语教学的高质量教材才会应运而生。同时,我们也看到,由于教材需求大,市场热,因而“短、平、快”的单本或单科教材较多,而成系列的教材相对较少,更有一些教材的质量尚待提高。我们认为,编写教材的目的是为了切实提高教学质量,而教材本身的质量才是市场竞争的“赛点”。有鉴于此,本系列教材力图形成以下几个特点:

一是系列性强。内容的设置全面、简明而自成系列,不但有传统的精读课教材,还有文章选读、翻译、口语、文学概论、语言概论等,相互间既有关联,又避免重复。

二是编写人员的实力强。本套教材主要由南开大学和天津外国语学院两所大学的教师合作编写,这些教师长年工作在教学第一线,具有丰富的教学经验和宽阔的视野,教材采用单本主编负责制和系列教材编委会负责制的双负责制的方式,保证了教材的质量。

三是教材的实用性强。教材的编写力在结合中国人学习日语,中国成人学习日语的特点,既吸收最近国外的最新研究成果,又结合我国的日语教学的实际。以传授知识为主的教材,用中文撰写,而不是简单编辑,适合我国高校学生或同等学力的人员学习。

四是内容新鲜活泼。力图打破以往教材的古板生硬的方式,尽量结合青少年学习的特点,在注重知识性的同时,注意增强趣味性,使学习的过程成为一种乐趣,让学习者乐而学之。

学习日语的方式因人而异,教材使用也因人而异。但是只用一种教材就能学好日语的

时代已经过时。在经济条件许可的条件下，手头多几本教材，可以在比较中学习，博采众长，有了知识的平台，多了许多新鲜感，强化了知识的系统性。

当然，在实际编写中，限于资料 and 人员等方面的原因，本套教材还存在有待改进的地方，我们推出它，也在于能在广泛听取意见的基础上使之进一步完善，在我国诸多日语教材中成为一套具有强大生命力的系列教材。

中国日语教学研究会 副会长 **修 刚**

中国日语教学研究会 副会长 **王健宜**

2004 年 8 月于天津

前言

《日语作品选读》是为大学日语本科专业学生编写的阅读教材，该教材通过对日语中不同题材、不同体裁文章的介绍，使学生熟悉各种常用文体和不同难易程度的文章，提高阅读、理解、分析问题、解决问题的能力，培养学生语言综合运用能力和文学作品的欣赏能力。

《日语作品选读》由七章 19 课组成。除在每一章前介绍不同类型体裁文章的特点及阅读方法外，每课均由课文、作家作品介绍、生词、语法与句型注释、问题解说、练习、实战演习 7 个部分构成。为方便读者，在现代诗、短歌、俳句和古典部分还增加了中文注释、翻译及欣赏。书后附有答案。

该教材课文题材广泛、体裁多样，多为现代、古代的经典名作，并集知识性、思想性、文学性为一体。通过学习，既可以把握日本文学整体脉络，也可以掌握随笔、小说、评论、现代诗、短歌、俳句、古典等不同文学作品体裁的构成、特点、表现形式，提高文学作品的阅读与理解力，增强语言实际运用能力，扩大知识面，开阔视野，在提高日语语言文学知识水平的同时，加深对日本社会、文化的了解，为更高阶段的学习打好基础。

在编写过程中，我们还充分考虑了文章的语言、风格、内容、时代感等多方面的因素，力求能提供一部令日语学习者满意的阅读教材。但由于水平有限，书中还存在一些不完善的地方，希望读者批评指正。

编者

2006 年 2 月

目 录

第一章 随筆	(1)
随筆とその読み方.....	(1)
第1課 言葉の力	(2)
問題文の要旨.....	(3)
新しい言葉.....	(4)
文法解釈.....	(5)
練習.....	(6)
設問の分析.....	(7)
実戦演習.....	(9)
第2課 花に逢う	(12)
問題文の要旨.....	(14)
新しい言葉.....	(14)
文法解釈.....	(16)
練習.....	(19)
設問の分析.....	(21)
実戦演習.....	(22)
第3課 東京の謎	(25)
問題文の要旨.....	(27)
新しい言葉.....	(27)
文法解釈.....	(28)
練習.....	(30)
設問の分析.....	(31)
実戦演習.....	(32)
第4課 昼の目と夜の耳	(35)
問題文の要旨.....	(37)
新しい言葉.....	(37)

	文法解釈	(39)
	練習	(41)
	設問の分析	(43)
	実戦演習	(44)
第5課	五十歩の距離	(48)
	問題文の要旨	(50)
	新しい言葉	(50)
	文法解釈	(53)
	練習	(54)
	設問の分析	(55)
	実戦演習	(56)
第二章	小説	(59)
	小説とその読み方	(59)
第6課	屋根の上のサワン	(61)
	作品の紹介	(63)
	新しい言葉	(63)
	文法解釈	(64)
	練習	(65)
	設問の分析	(66)
	実戦演習	(68)
第7課	山月記	(72)
	作品の紹介	(73)
	新しい言葉	(73)
	文法解釈	(75)
	練習	(77)
	設問の分析	(79)
	実戦演習	(79)
第8課	行人	(82)
	作品の紹介	(84)
	新しい言葉	(85)
	文法解釈	(86)
	練習	(88)
	設問の分析	(89)
	実戦演習	(90)

第9課	灰色の月	(93)
	作品の紹介.....	(95)
	新しい言葉.....	(95)
	文法解釈.....	(97)
	練習.....	(98)
	設問の分析.....	(100)
	実戦演習.....	(101)
第10課	令嬢アユ	(105)
	作品の紹介.....	(107)
	新しい言葉.....	(108)
	文法解釈.....	(109)
	練習.....	(111)
	設問の分析.....	(112)
	実戦演習.....	(113)
第三章	評論	(116)
	評論とその読み方.....	(116)
第11課	日本美の周辺	(118)
	問題文の要旨.....	(119)
	新しい言葉.....	(119)
	文法解釈.....	(121)
	練習.....	(122)
	設問の分析.....	(123)
	実戦演習.....	(123)
第12課	近代日本の文明的地位	(127)
	問題文の要旨.....	(129)
	新しい言葉.....	(130)
	文法解釈.....	(132)
	練習.....	(134)
	設問の分析.....	(136)
	実戦演習.....	(136)
第13課	日本の思想	(142)
	問題文の要旨.....	(144)
	新しい言葉.....	(144)
	文法解釈.....	(147)

	練習	(149)
	設問の分析	(150)
	実戦演習	(151)
第14課	省略の文学	(153)
	問題文の要旨	(155)
	新しい言葉	(155)
	文法解釈	(157)
	練習	(160)
	設問の分析	(161)
	実戦演習	(162)
第15課	文化のフェティシズム	(166)
	問題文の要旨	(168)
	新しい言葉	(168)
	文法解釈	(171)
	練習	(174)
	設問の分析	(175)
	実戦演習	(177)
第四章	現代詩	(179)
	現代詩とその読み方	(179)
第16課	詩四首	(180)
	作者紹介	(182)
	新しい言葉	(183)
	文法解釈	(185)
	詩の鑑賞	(186)
	練習	(189)
第五章	短歌	(193)
	短歌とその読み方	(193)
第17課	和歌と短歌	(196)
	I 古代編 和歌	(196)
	II 近・現代編 短歌	(198)
	作者紹介	(199)
	作品紹介	(201)
	新しい言葉	(201)
	文法解釈	(203)
	練習	(204)

第六章 俳句	(206)
俳句とその読み方.....	(206)
第18課 俳諧と俳句	(209)
I 古典編.....	(209)
II 近・現代編.....	(210)
作者紹介.....	(212)
新しい言葉.....	(213)
文法解釈.....	(213)
練習.....	(214)
第七章 古典	(216)
古典とその読み方.....	(216)
第19課 古文	(218)
新しい言葉.....	(222)
文法解釈.....	(226)
練習.....	(230)
解答	(233)

第一章 随 筆

随筆とその読み方

◆随筆とは

随筆とは、見聞・経験・回想したこと、感じたこと、考えたことなどを、おりにふれて自由に書いた文章である。

作者が身近のできごとの雑記から、それについての感想・意見へと展開する文章が多い。できごとの叙述と、感想・意見の叙述を読み分ける。

◆基本パターン

- ①文学的随筆 感覚的・叙情的に感想を書いたもの。
- ②思索的随筆 人生観や处世観などについての考えを中心に、説明的に書いたもの。
- ③科学的随筆 科学的な知識に基づいて書いたもの。
- ④生活的随筆 日常生活の中での見聞や経験を書いたもの。

読む手引き

◆動機と主題 筆者がその文章を書こうとした動機をとらえる。連想の発端となっているできごと・感じたこと・考えたこと、また、文章全体の背景を推測して考える。

文章全体の中で、最も中心的な感じ方・考え方が主題である。主題は、結論的に述べられている場合や、それぞれの文および段落で個別に述べられている感じ・考えをまとめて導き出せる場合がある。主題を動機と関連させて考えることも必要である。

◆個性的な特色の把握 比喩などの修辞・用語・文体・形式などに着目し、表現上の特色を理解する。

随筆の題材、筆者のものの見方・感じ方、話題の展開のしかたなどから、内容上の特色をとらえ、発想の面白さや連想の豊かさな広がりを読み取る。

筆者の心情を直接的に表す言葉や、筆者の発言・行動・動作・態度・表情をおさえる。また、事実がどのようなとらえ方をされているのかを読み取り、その奥にある作者の思いを考える。

第1課 言葉の力

おおおかまこと
大岡信

我々が贈り物というとき、たいていは物を贈ることを意味する。物に託して自分の気持を贈るのではあるが、相手に渡されるのはだいたい物であるのが普通である。ところがフランス語の贈り物という言葉の中には、もと、人を喜ばせおもしろがらせる言葉という意味があった。人を喜ばせるために言葉を贈り物にするという思想があった。これはなかなか意味深いことのように思われる。実は日本でも、古い時代にはそういう思想があった。現代においては言葉を贈り物にするという思想は、我々の中に自覚的にはあまりないと思われるが、平安時代あたりには、言葉は時に最高の贈り物だった。

それはどういう意味かという、言葉の贈り物が男女の間で決定的な役割を果たすことが多かったからである。もちろん、それは和歌というものを日常生活必需品としていた貴族階級のことだが、彼らの間では相手に近づこうとすると相手に贈る最も重要な贈り物は、歌だった。

ところで、なぜ言葉のようなものが贈り物になり得たのだろうか。思うに、和歌一首一首は実にささやかなものにすぎない。今日わたしたちが読むことのできるそれらの歌の数々を読んでみれば、それらのあまりの平凡さにかえって驚かされるというようなものである。それも当然のことだった。五七五七七、わずか三十一文字の和歌というものは、どんなに工夫してみてもごくわずかな事柄しか言えはしない。けれども、それは一度にはわずかなことしか言えないが故に、かえって徐々に相手に言葉が浸透してゆくものとなり、贈答の繰り返しを通じてしだいに互いの心が見えてくるという効果が生じたのだった。

我々が人に贈り物をするときのことを考えてみると、この問題はいつそうよく分かるだろう。つまり、だれかに贈り物をする場合、金額の非常に張ったものをいきなり相手に贈り付けたとする。相手のほうでは驚く。まともな人間だったら、何でこんなものを贈ってきたのかといぶかしく思い、迷惑さえ感じるのが普通である。果ては逆に疑心暗鬼にさえるかもしれない。いったい何を考えてこんなことをするのか、この人は？ふつり合いに高価なものを贈るということは、相手に落ち着かなくさせる点で逆効果でさえあるだろう。ささやかな贈り物こそ、かえって人の心をよく相手に伝える。

例えば貧しい青年と娘が好き合ったとき、どんな贈り物をするだろうか。物は贈れなくとも、言葉を贈ることはできるだろう。ある日二人はどこかへピクニックに行く。美しい山があり湖がある。仮に——こんな言葉はきざに聞こえるかもしれないが——青年が恋人に向かって、「今日のこの風景を君にあげよう。」と言ったとする。その言葉が、娘にとっては永く忘れられない贈り物として心に残るということは、あり得ることである。その風景は万人のために存在している風景だけれども、愛し合う二人にとっては、他のだれにも見えない光がその風景を照らしているのであって、つまりそれは二人だけのための風景なのだった。男のささやかな言葉を通して、一つの風景は娘の中に、ほかの人には見えないある輝きとともに、別の一風景となってすみつく。すなわち彼女は、他の何ものをもつてしても替え難い贈り物を受け取るのである。目の前の風景は、そういう一人の人間の発する言葉が付け加わることによって「贈り物」となる。

確かに、贈り物というのはささやかなものであっていい。ささやかだからこそ、それをもったほうでは、自分の心の中でそれを暖め、もてあそび、楽しむことができる。大切なことは、まことに平凡な話だが、心がこもっているかいがないかにあつて、物や金額の大小にはない。「今日のこの風景を君にあげよう。」という言葉がそれを発した青年とそれを聞く娘との関係において、豊かな音楽を奏でるかどうかが、大切な唯一のことである。

「言葉の力」というとき、まずわたしの念頭に浮かぶのはこういうことにほかならない。「言葉の力」という題目を掲げた話なら、言葉というものの偉大さをあれこれ強調するに違いないだろう、と思われるかもしれないが、わたしはむしろ、言葉というもののささやかさを強調したい。一つ一つの言葉はまことに頼りない、ささやかなものだということを言いたい。しかしその、頼りなくささやかなものの集まりが、時あつて驚くべき力を発揮するところに、実は言葉の昔も今も変わらない偉大な力があるのだった。

大岡信(1931～) 静岡県生まれ。詩人。文化功労者。日本芸術院会員。詩集『記憶と現在』『故郷の水へのメッセージ』(現代詩花椿賞)『世紀の変り目にしやがみこんで』、評論『現代詩人論』『詩人・菅原道真』(芸術選奨文部大臣賞)『紀貫之』(読売文学賞)『折々のうた』(菊池寛賞)他多数。

問題文の要旨

我々が日常用いている一つ一つの言葉は誠に頼りない、ささやかなものである。しかしその言葉が、組み合わせ方や発せられる時と場合によって、驚くべき力を発揮することがある。そこに言葉の偉大な力があるのだ。

新しい言葉

贈り物(おくりもの)
 託する(たくする)
 渡す(わたす)
 意味深い(いみぶかい)
 最高(さいこう)
 必需品(ひつじゅひん)
 貴族(きぞく)
 近づく(ちかづく)
 ささやか
 平凡(へいぼん)
 わずか
 事柄(ことがら)
 徐々に(じょじょに)
 浸透(しんとう)
 贈答(ぞうとう)
 いっそう
 いきなり
 いぶかしい
 逆に(ぎゃくに)
 疑心暗鬼(ぎしんあんき)
 ふつり合い(ふつりあい)
 高価(こうか)
 ピクニック
 仮に(かりに)
 きざ
 照らす(てらす)
 輝き(かがやき)
 すみつく
 発する(はつする)
 付け加わる(つけくわわる)

礼物, 礼品
 托付, 委托; 托词; 寄托
 交付, 交给; 渡
 意味深长, 耐人寻味
 最高, 最好
 必需品
 贵族
 接近, 靠近
 小, 细小; 微薄
 平凡, 普通
 少许, 一点点; 略微
 事情, 事态
 慢慢地, 逐渐地
 渗透, 渗入
 赠答, 互赠礼品
 更加, 越发
 突然, 冷不防
 奇怪, 令人诧异
 相反
 疑神疑鬼
 不相称, 不般配
 高价, 昂贵
 郊游, 野游
 暂时, 暂且; 假定, 假如
 装腔作势, 令人作呕
 照耀; 对照, 参照
 光辉, 光耀
 定居, 落户
 发出; 发放; 发端; 发源
 增加, 附带上

もてあそぶ

玩赏；玩弄，摆布；

こもる

包含；闭门不出；不通气

大小(だいしょう)

大小

奏でる(かなでる)

演奏

念頭(ねんとう)

心头，心上

浮かぶ(うかぶ)

想起；浮现，露出；浮起，浮出；漂浮

掲げる(かかげる)

举起，高挂；掀起；刊登，登载

偉大(いだい)

伟大

まことに

实在，诚然，非常

頼りない(たよりない)

无依靠；没把握，不放心

文法解釈

- ところがフランス語の贈り物という言葉の中には、もと、人を喜ばせおもしろがらせる言葉という意味があった／然而法语中，礼物这个词里原来有让人高兴、让人感到有趣这种意思。

“～がる”为接尾词，前接形容词或形容动词词干，意为“感到……，觉得……；自以为……”。

△ 寒がる／感觉冷

△ 嬉しがる／觉得快乐

△ 不思議がる／觉得奇怪

△ 偉がる／自以为了不起

- ささやかな贈り物こそ、かえって人の心をよく相手に伝える／正是微不足道的东西反而最能向对方表达心意。

“こそ”为系助词，加强语气。意为“(与其他相比)某一方反而更加……”。

△ わたしこそおわび申し上げねばなりません／倒是我应该道歉的。

△ 君たちは彼を批判するが、わたしに言わせれば、君たちの方こそ批判されるべきだ／现在你们批判他，要依我说，你们倒是应该受到批判的一方。

△ なにを読んだかよりも、どのように読んだかということこそ大切である／选择读什么书重要，如何去读书更重要。